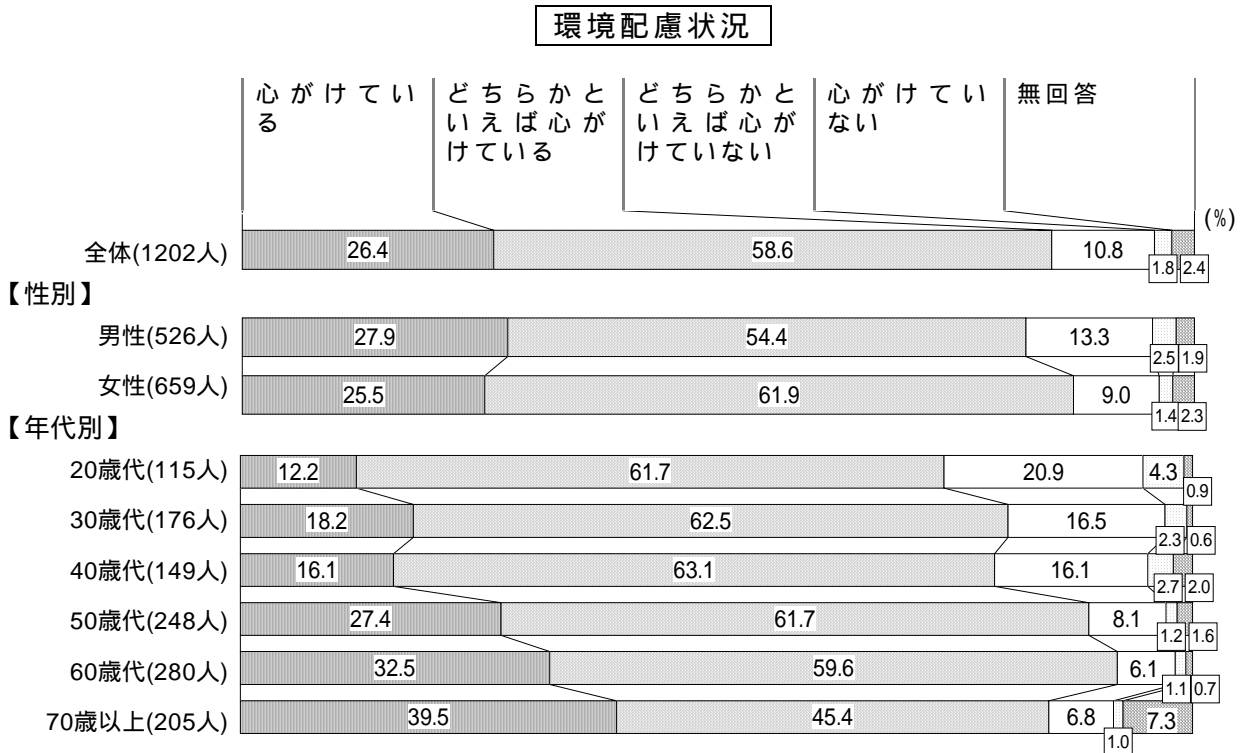


3 . 環境について

3 - 1 . 環境配慮状況

“ 環境に配慮した生活を心がけている ” 85.0%

問 9 . あなたは、環境に配慮した生活を心がけていますか。1つ選び、番号を で 囲んでください。



全体で見ると、「心がけている」は26.4%、「どちらかといえば心がけている」は58.6%で、両者を合わせた85.0%が“環境に配慮した生活を心がけている”と回答しています。

年代別で見ると、「心がけている」は、70歳以上で39.5%と高くなっています。また、“環境に配慮した生活を心がけている”は、60歳代で92.1%と高く、50歳代でも89.1%となっています。一方、20歳代では、「心がけていない」(4.3%)と「どちらかといえば心がけていない」(20.9%)の両者を合わせた“環境に配慮した生活を心がけていない”が25.2%と比較的高くなっています。

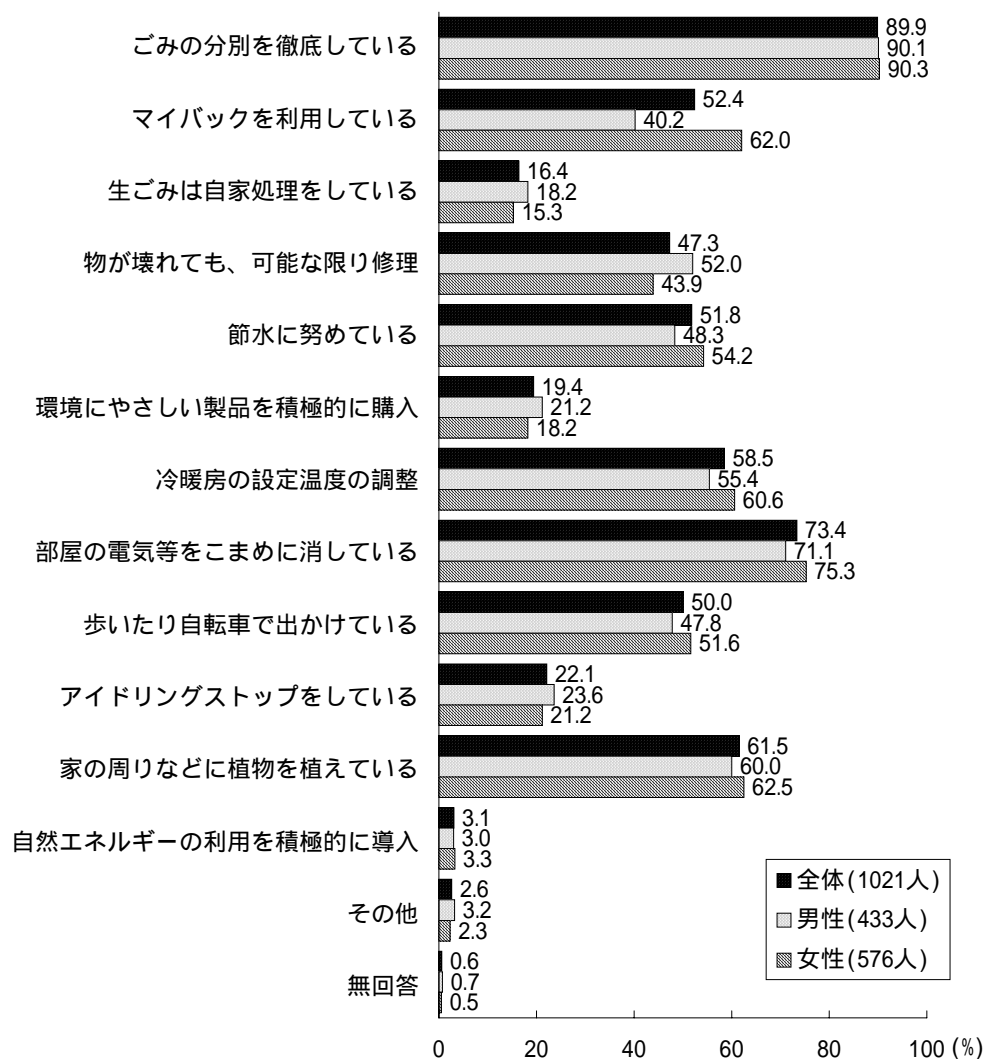
3 - 2 . 行っている環境活動

「ごみの分別を徹底している」89.9%

(問9で「心がけている」または「どちらかといえば心がけている」とお答えの方におたずねします。)

問9 - 1 . 日常生活の中で、具体的に心がけていることは何ですか。あてはまるものをすべて選び、番号を で囲んでください。

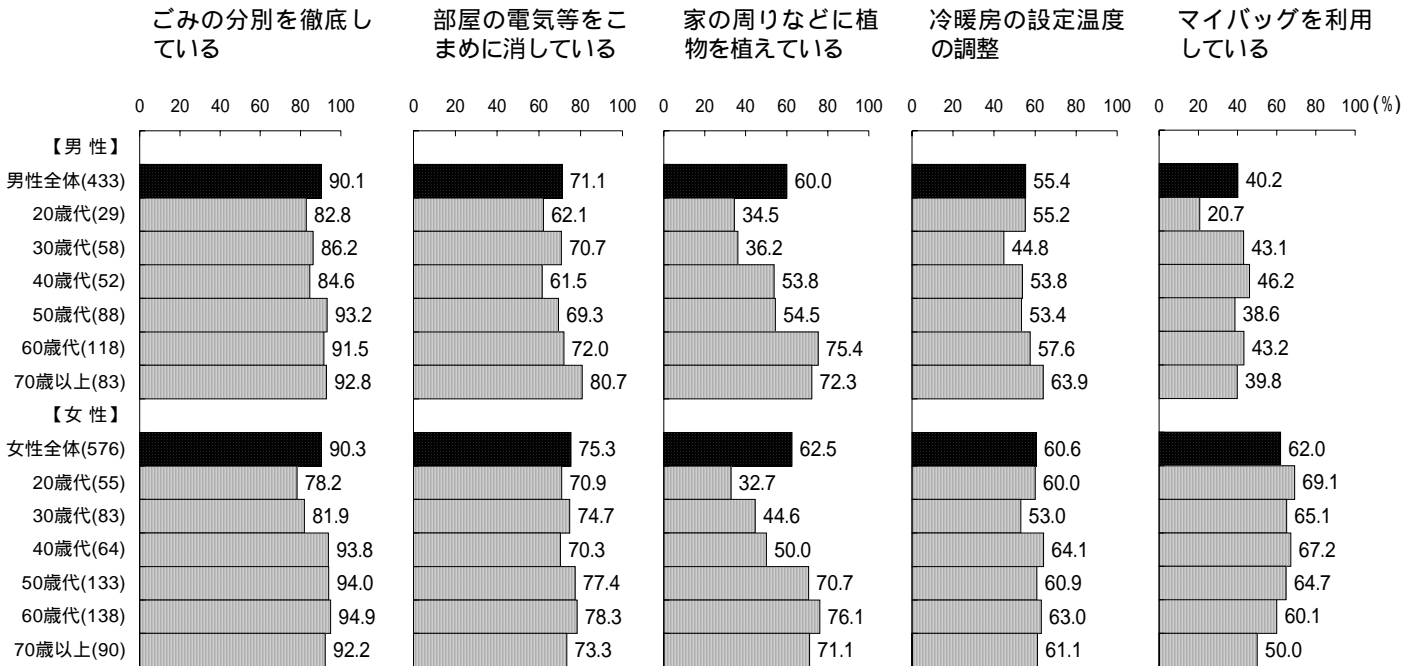
行っている環境活動 (全体・性別)



全体で見ると、「ごみの分別を徹底している」が89.9%で最も高く、次いで「部屋の電気等をこまめに消している」(73.4%)、「家の周りなどに植物を植えている」(61.5%)、「冷暖房の設定温度の調整」(58.5%)、「マイバッグを利用している」(52.4%)と続いています。

性別で見ると、「マイバッグを利用している」は、女性(62.0%)が男性(40.2%)を21.8ポイント上回っています。

行っている環境活動（性・年代別 上位5項目）



性・年代別で見ると、「ごみの分別を徹底している」は、男女ともすべての年代で高い割合で行われており、特に男性は50歳代以降、女性は40歳代以降の年代で9割台となっています。

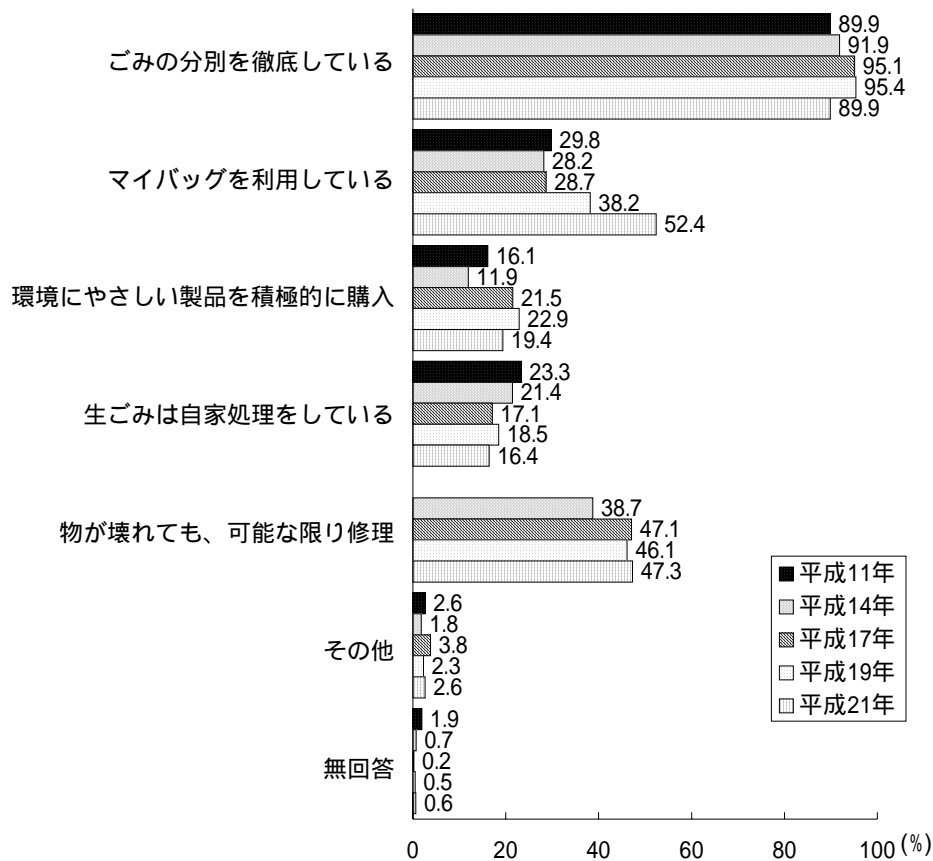
「部屋の電気等をこまめに消している」は、男性の70歳以上で80.7%と高く、女性はいずれの年代でも7割台となっています。

「家の周りなどに植物を植えている」は、男性では60歳代以降、女性は50歳代以降の年代で7割台となっています。

「冷暖房の設定温度の調整」は、男性の70歳以上で63.9%と高く、女性では、30歳代を除き6割台となっています。

「マイバッグを利用している」は、男性はいずれの年代も半数以下となっていますが、女性の割合は全体的に高く、20歳代から60歳代まで6割台となっています。

行っている環境活動（経年比較）



（平成19年度までの調査と共通の選択肢についてグラフ化しています。また「環境にやさしい製品を積極的に購入」は、平成11年度及び14年度調査の「リサイクルしやすい商品を買っている」と比較しています。平成19年度までの「資源ゴミの分別をしている」は、今年度より「ごみの分別を徹底している」、「買い物の際、買い物袋を持参」は、今回の調査より「マイバッグを利用している」と比較しています。）

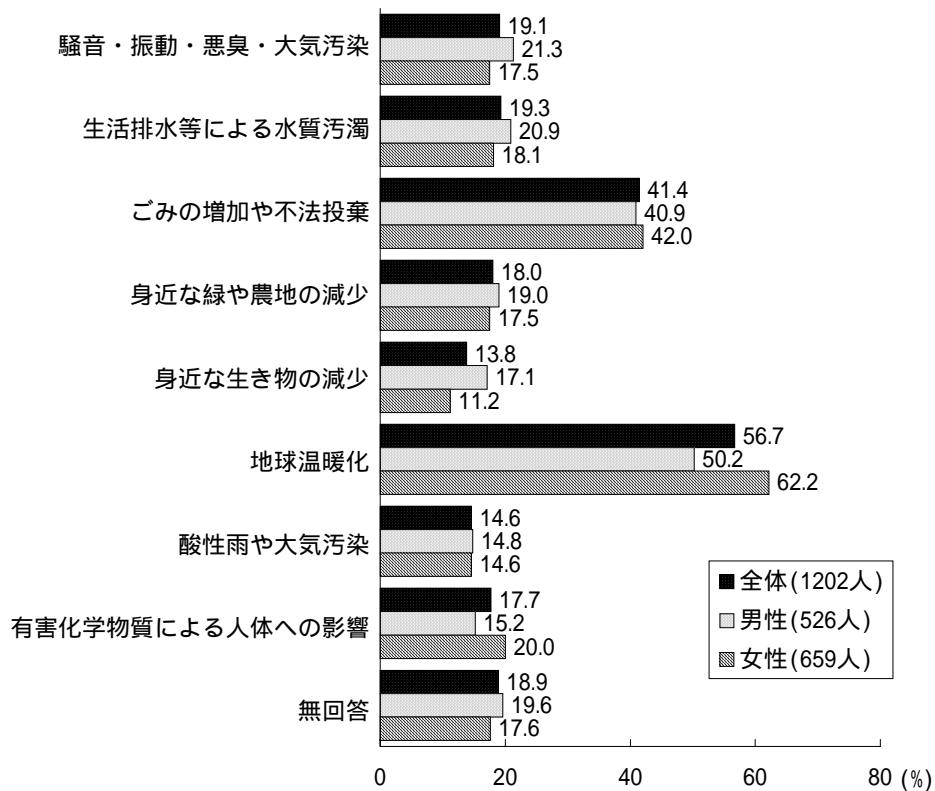
平成17年度からの調査結果と比較すると、「マイバッグを利用している」（前回までは「買い物の際、買い物袋を持参」）が大きく上昇傾向にあり、平成19年度より14.2ポイント増加しています。「ごみの分別を徹底している」（前回までは「資源ゴミの分別をしている」）は平成19年度より5.5ポイント減少しています。

3 - 3 . 環境問題

深刻度、重要度ともに比較的高い「ごみの増加や不法投棄」「地球温暖化」

問10. 環境問題について、次にあげる項目で、「すでに深刻な問題である」ということと、今後、改善していくうえで「重点的に取り組んでいく必要がある」ということについて、それぞれ3つまで選び、番号を で囲んでください。

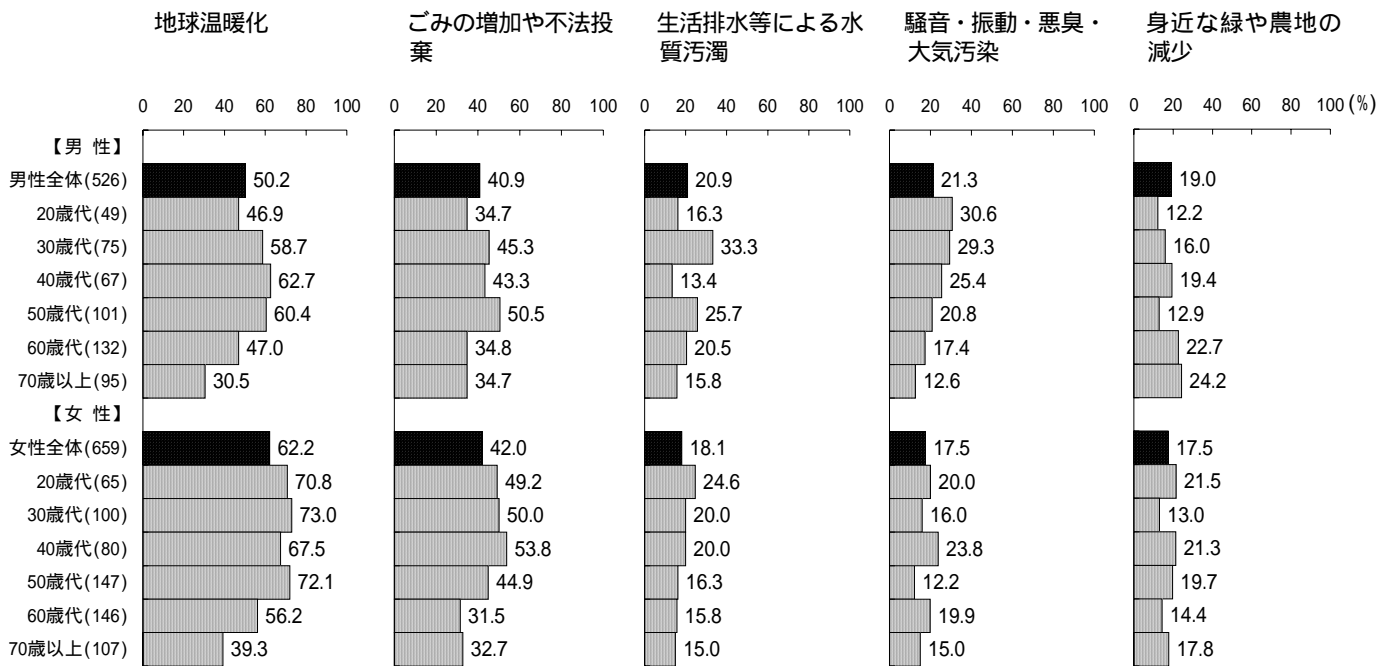
深刻と考える環境問題（全体・性別）



深刻と考える環境問題は、全体で見ると、「地球温暖化」が56.7%で最も高く、次いで「ごみの増加や不法投棄」(41.4%)、「生活排水等による水質汚濁」(19.3%)、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」(19.1%)、「身近な緑や農地の減少」(18.0%)と続いています。

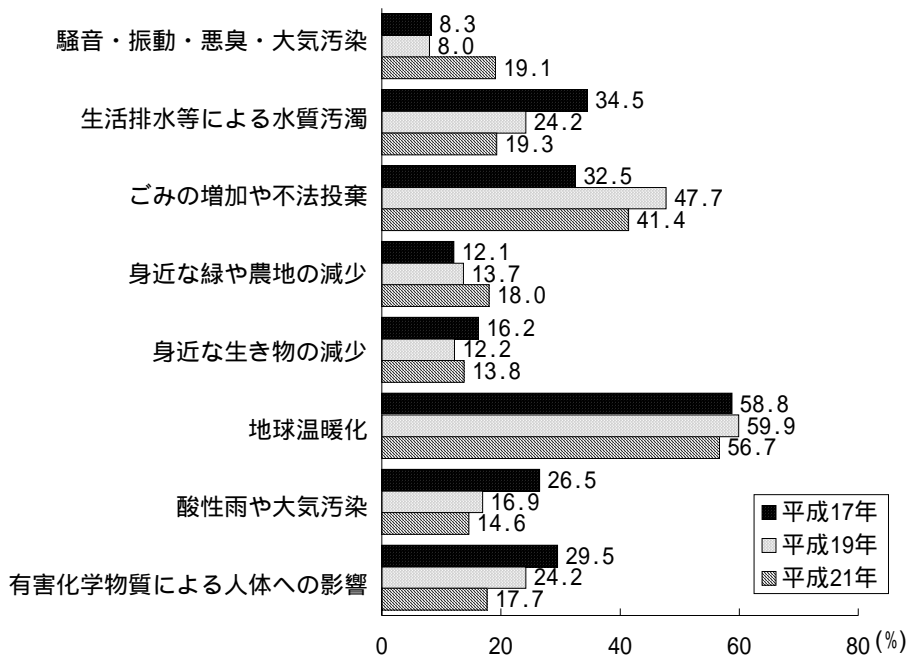
性別で見ると、「地球温暖化」は、女性(62.2%)が男性(50.2%)を12ポイント、「有害化学物質による人体への影響」は、女性(20.0%)が男性(15.2%)を4.8ポイントそれぞれ上回っています。また、「身近な生き物の減少」は、男性(17.1%)が女性(11.2%)を5.9ポイント上回っています。

深刻と考える環境問題（性・年代別 上位5項目）



性・年代別でみると、「地球温暖化」は、女性の30歳代で73.0%、50歳代で72.1%、20歳代で70.8%、男性の40歳代で62.7%、50歳代で60.4%と高くなっています。「ごみの増加や不法投棄」は、男性の50歳代（50.5%）、女性では40歳代（53.8%）、30歳代（50.0%）が高くなっています。

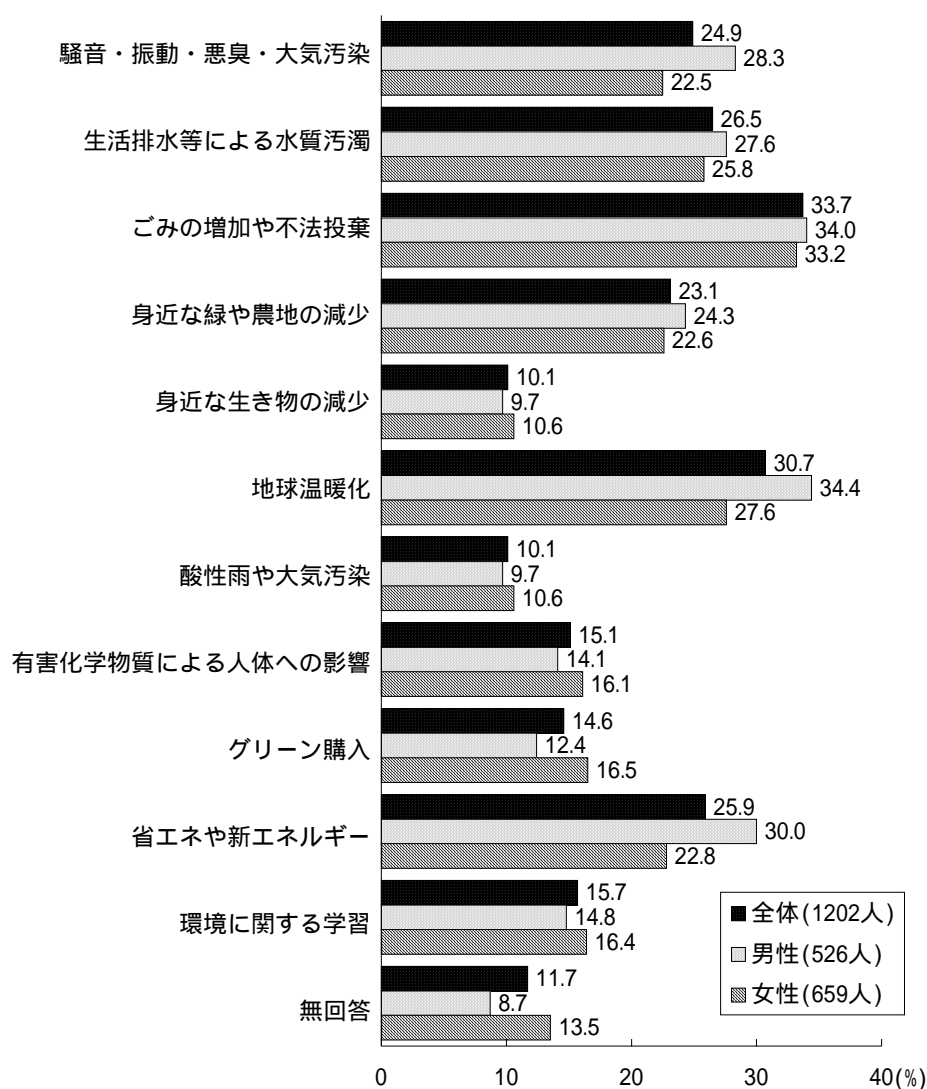
深刻と考える環境問題（経年比較）



「騒音・振動・悪臭・大気汚染」は平成19年度調査までの「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」と比較しています。

平成17年度からの調査結果と比較すると、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」(前回までは「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」)は、前回調査より11.1ポイント増加しています。一方、「ごみの増加や不法投棄」は前回15.2ポイントと比較的大きく増加しましたが、今回の調査では6.3ポイントの減少に転じています。また、「有害化学物質による人体への影響」は6.5ポイントの減少となっています。「生活排水等による水質汚濁」は、平成19年度から4.9ポイントの減少ですが、平成17年度の調査からみると、最も減少(15.2ポイント)した項目となっています。

重点的に取り組んでいく必要がある環境問題 (全体・性別)



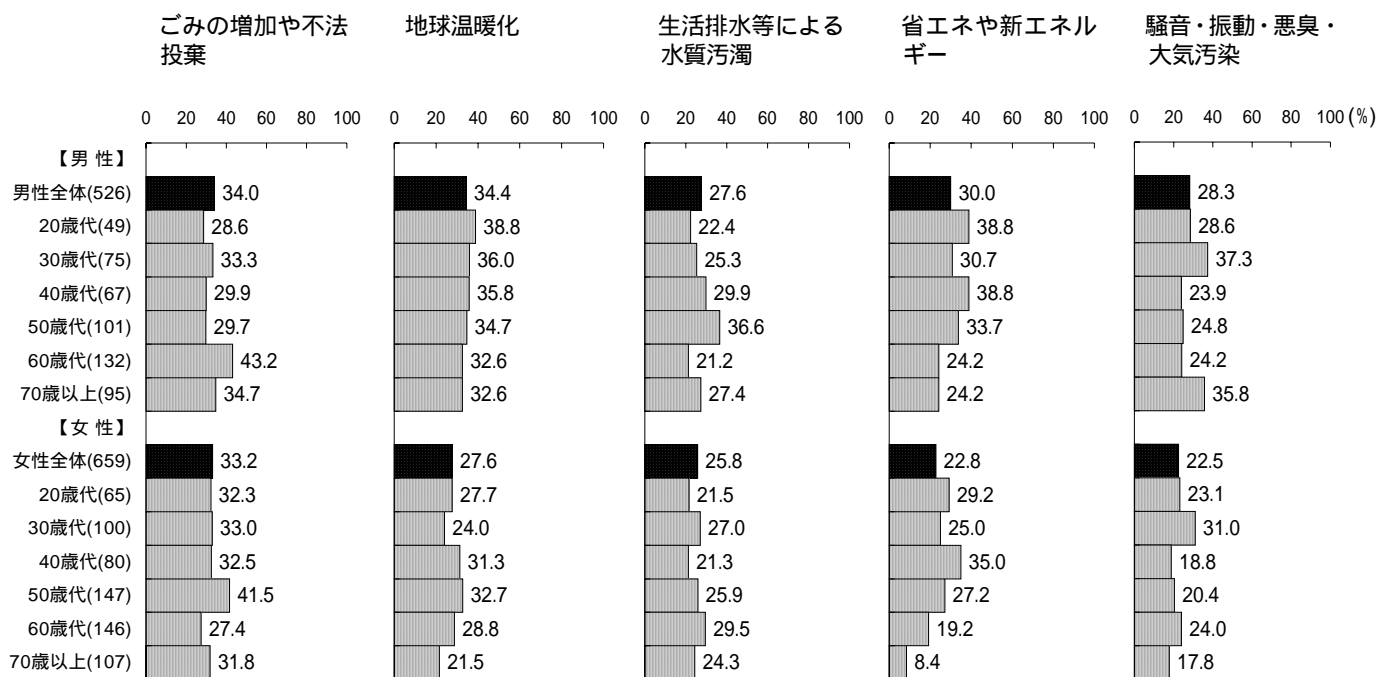
「騒音・振動・悪臭・大気汚染」は平成19年度調査までの「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」と比較しています。

重点的に取り組んでいく必要がある環境問題は、全体でみると、「ごみの増加や不法投棄」が33.7%で最も高く、次いで「地球温暖化」(30.7%)、「生活排水等による水質汚濁」(26.5%)、「省エネや新エネルギー」(25.9%)、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」(前回までは「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」)(24.9%)、「身近な緑や農

地の減少」(23.1%)と続いています。

性別で見ると、「省エネや新エネルギー」は男性(30.0%)が女性(22.8%)を7.2ポイント、「地球温暖化」は、男性(34.4%)が女性(27.6%)を6.8ポイント、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」は、男性(28.3%)が女性(22.5%)を5.8ポイント上回っています。

重点的に取り組んでいく必要がある環境問題(性・年代別 上位5項目)



性・年代別で見ると、「ごみの増加や不法投棄」は、男性の60歳代(43.2%)、女性の50歳代(41.5%)で高くなっています。

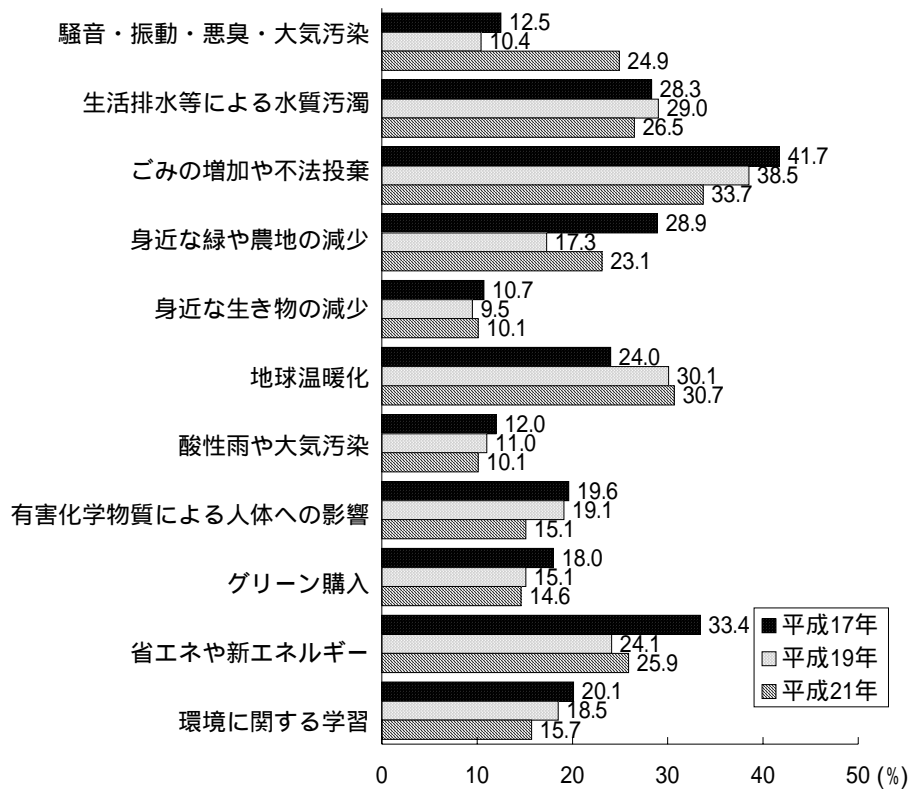
「地球温暖化」は、男性ではいずれの年代も3割台となっています。

「生活排水等による水質汚濁」は、男性の50歳代で36.6%と高くなっており、女性ではいずれの年代でも2割台となっています。

「省エネや新エネルギー」は、60歳代以降の年代では比較的低くなっています。

「騒音・振動・悪臭・大気汚染」(前回までは「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」)は男女の30歳代と男性の70歳代で3割台と比較的高くなっています。

重点的に取り組んでいく必要がある環境問題（経年比較）



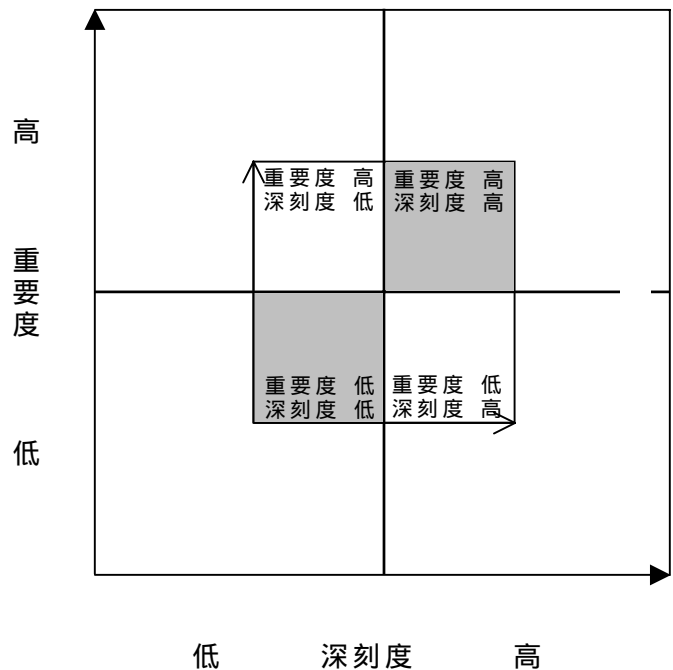
「騒音・振動・悪臭・大気汚染」は平成19年度調査までの「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」と比較しています。

平成17年度からの調査結果と比較すると、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」（前回までは「幹線道路や工事現場からの騒音・振動」）は、前回調査より14.5ポイント増加、「身近な緑や農地の減少」は、5.8ポイント増加しています。一方、「ごみの増加や不法投棄」や「有害化学物質による人体への影響」などでは減少傾向となっています。

環境問題の深刻度及び重要度 (%)

	深刻度	重要度
騒音・振動・悪臭・大気汚染	19.1	24.9
生活排水等による水質汚濁	19.3	26.5
ごみの増加や不法投棄	41.4	33.7
身近な緑や農地の減少	18.0	23.1
身近な生き物の減少	13.8	10.1
地球温暖化	56.7	30.7
酸性雨や大気汚染	14.6	10.1
有害化学物質による人体への影響	17.7	15.1
グリーン購入		14.6
省エネや新エネルギー		25.9
環境に関する学習		15.7
無回答	0.0	11.7
全 体	100.0	100.0

環境問題の深刻度及び重要度 (%)



上記のグラフでは、「すでに深刻な問題である=(深刻度)」を横方向、「重点的に取り組んでいく必要がある(=重要度)」を縦方向に示しています。

図中、右上の領域の「ごみの増加や不法投棄」、「地球温暖化」は深刻度・重要度ともに高くなっています。この2項目は個人が、身の回りの事象として実感する機会の多い事項であり、かつ、各種メディアにおいても取り上げられる機会の多いものです。一方で「身近な生き物の減少」、「酸性雨や大気汚染」は、深刻度・重要度ともに低くなっています。

その他に、左下の領域の「有害化学物質による人体への影響」、「身近な緑や農地の減少」、「騒音・振動・悪臭・大気汚染」も深刻度・重要度ともに低くなっています。